

黒川博行

# 雨に殺せば

文藝春秋

あがはい  
曲り角多し  
危険 最除行

黒川博行

# 雨に殺せば

文藝春秋

雨に殺せば

一九八五年六月十五日第一刷

定価 九〇〇円

著者 黒川博行

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三  
電話(〇三)二六五―一二二一

印刷 凸版印刷  
製本 加藤製本

万一落丁・乱丁がありましたらお取替えます

雨に殺せば

A 装  
D 幀  
坂 上  
田 原  
政 徹  
則 徹

やっと帰り着いた。ガスストーブのスイッチを入れ、次いでポットのコンセントを差し込む。コートをベッドの上に放り、縫れたネクタイを外しにかかった時、電話が鳴った。壁の時計を見る。もう午前一時三十分、非常識だ。すぐに出るのも業腹で、しばらくようすをみることにした。汗じみたワイシャツのボタンを外しながらバスルームへ行き、水道の栓をひねった。ワイシャツと靴下を洗濯機に放り込み、つまり私の夜毎の儀式を終えて部屋に戻れば、まだ電話が鳴っている。

あつさり受話器をとった。あとで、

(あれ、誰からの電話やったんやろ……理恵ちゃんか、慶子ちゃんか)

と、じくじく考える自分の気質を知っているからだ。

眠そうな声を作って、

「はい、黒木です。こんなに遅うにどなた？」

「わしや、服部や。遅うて悪いか」

「いえ……」

「君こそ何や。えらい遅いご帰館、いやご帰宅やないか。いったいどこで何しとったんや、何回も連絡したんやで……」

何度連絡しようとかちらの知ったことじゃない。

「歸りにちよいと一杯ひっかけてたもんですから」

「ちよいと一杯が一時を過ぎるんかいな……結構なご身分や。独身はよろしいな」

うるさい。勤務時間を過ぎたら、どこで何をしようと勝手だ。全生活をあんたに委ねられるか

——と、これは私が喉の奥に押しとどめた言葉。

「どうしたんです……何かあったんですか」

直屬上司である服部にこちらのいらだちを気づかれぬよう、努めて平静な口調で喋ってはいたが、眼と眼の間がせまくなり、唇がへの字に曲るのまで隠す必要はなかった。

「さっき……つい一時間ほど前や。森之宮の団地でな、飛び降り自殺があったんや」

「飛び降り自殺で……ほんまの自殺なら一課の管轄と違いますがな。関係ないでしょ」

「それが大ありなんや。飛び降りたん……三協銀行築港支店の行員なんや」

「ええ?！」

「川添隆幸、二十九歳。きのう黒さんが事情聴取したうちのひとりや」

「すると……」

「そや、まだ断定はできんけど、犯行に一枚噛んどったんやろ。捜査の手が身辺に迫って来たと感じたんかもしれん。ま、詳しいことは現場へ来てからや。とりあえず家を出てくれ」

「今すぐですか」

「そう、今すぐや」

「けど……」

「何や、どうかしたんか」

一杯機嫌で帰り着き、さあ眠ろうという段になってまた出勤を要請されることなど誰が歓迎する。せめて、酔い覚めの熱いコーヒーをゆっくり味わってからにして欲しい。

ポットの蓋がクツクツ動いている。

「ワイシャツ、洗うてしまいました」

言いわけになっていない。

「あほぬかせ。ワイシャツの替えくらいあるやろ」

「はあ……ありますけど」

「ほなら、今すぐ出てくれ。ええな、今すぐやぞ」

服部はうっかり電話を切った。くそっ、忌々しい。

ワイシャツと靴下だけは新しいのと替えて再び外へ出た。日付は変わって、もう十二月十二日、寒さに身が縮んだ。

森之宮に着いたのは午前二時五分過ぎ。大阪城公園のすぐ東側に位置しているだけに、附近は比較的緑が多く、また夜間人口が少ないこともあって、ひっそりと静まりかえっている。

敷地のまわりを高さ一メートルのフェンスと、幅三メートルの植栽帯がとりまいていて、中に六棟の十四階建てビルが整然と平行に並んでいるのが、住宅都市整備公団、森之宮第二団地であった。古い団地らしくゆったりとした配置だ。

敷地内に入っすぐ、南端のA棟と植栽帯にはさまれた藤棚のあたりに煌々（こうこう）とライトが点され、周辺を数人のやじ馬（やじうま）が取り囲んでいることで、そこが飛び降り（とびおり）の現場だと知れた。

警備の若い警察官に手帳を見せると、ハハッとかしこまって姿勢を正した。少なからず優越感

を覚える。何といつても私は府警捜査一課の刑事である。

ロープを跨いで中に入る。三十センチ角のコンクリート板を敷きつめた歩道兼駐車スペースのあちらこちらに、チョークで飛び散った血痕を丸く囲んだ印があり、その円形の集結するところに大きく人間の形が描かれていた。建物からは約七メートル、植栽帯からは約六メートル離れた中間地点だ。

ちょうど頭にあたる部分に、<sup>付けた</sup>夥しい血が付着して黒く固まっている。これが、つい半日前、私の事情聴取を受け、しどろもどろの返事をしていた男の最後に残し得た唯一の痕跡かと思うと、妙に感傷的な気分になる。

たばこを取り出して<sup>くわ</sup>啜えた時、ポツと眼の前に光が走った。さっき別れたばかりのママちゃんがマツチを持って笑っている。

——私と同じ府警捜査一課強盗班刑事。フルネーム亀田淳也。<sup>兄</sup>はともかく名の方は新派の二枚目でも充分通用する甘い響きを持っている。そろそろ三十に届こうかという年だが、童顔、色黒で背が低く、ころころしたその体型から、みんなは彼を「ママダ」と呼ぶ。「豆狸」<sup>まめだ</sup>と「カメダ」をひっかけたものだ。躁鬱症の鬱だけを母親の胎内に忘れてきたような人物で、金つばまなこをグリグリまわしながら息つく暇なく喋りまくる。性格と体格を見事に一致させた好例ではある。その風貌と気易さが訊込みや取調べの際、強力な武器となつて、若手であるにもかかわらずペテラン捜査員に伍していける理由となつている。

この愛すべきママちゃんが私の主たる相棒というわけだ。

「首尾はどうでした、黒さん……例の女子大生？　その顔からするとフラれたみたいですね。ま、よろしいがな、またの機会があります。それにしても独身貴族はよろしいなあ、毎晩のように飲

みに行けて……」

ついでに自分もたばこに火を点け、けむりを吐きながらマメちゃんが話しかけた。また「独身」である。三十路も半ばの男にいう言葉ではない。服部といい、マメちゃんといい、言葉の使い方に気配りが欠けている。

「死体どうなった」

話題を変えることにする。

「一応の検死は終って、さっき阪大へ運んだばかりです」

「解剖するんか」

「当然ですがな。いくら自殺でも変死であるには違いないし、事件との関係もあるから……。どこぞの政治家みたいにすぐ火葬にするわけにはいきません」

「川添の死んだ状況、詳しく話してくれ」

「それやったら上へ行きましょ。十一階が自宅になってます」

「屋上から飛び降りたんと違うんかいな」

「自宅からですわ。とにかく行ってみましょ。係長もいます」

古めかしいエレベーターに乗る。壁のあちらこちらに、稚拙な線で例の三文字や不粹な図形が描かれているのは賃貸住宅の宿命か。

十一階で降り、マメちゃんのあとに続く。薄暗い廊下をはさんで両側に部屋が並んでいる。

へ二一〇五、川添隆幸、律子、隆子への表札を確認する。娘がいるらしい。川添の年齢から推して、せいぜい四、五歳というところか……罪作りな父親だ。

重い鉄の扉を引いた。

「おう黒さん、お早いお着き。頭、しゃんとしたか」

私を見て服部が声をかけた。浅黒いというよりは黄色っぽいその顔には深い皺が何本も貼りつき、それが窪んだ眼と前に突き出た厚い唇をとりまいている。痩せた体をくすんだ茶色の背広で包み、古くなつてガタがきいてゐるのか、よくずり落ちるメガネをせわしなく元に戻しながら飄々と歩く姿は田舎の好々爺を思わせるが、どっこいその実体は、強引、出しゃばり、独善、無神経な上に言行不一致で……きりが無い。

服部の通称はトリさん。ハットリのトリではなく、あげ足取りのトリさんである。自分からは何の提案もできないくせして、他人の意見に対しては遠慮容赦のない皮肉、悪口を浴びせるところにその由来がある。

「係長、詳しい状況教えて下さい」

一応は仕事熱心な部下を演じてみせる。

「ま、そんなに急くな。靴脱いでこっちへ来てみい」

狭い玄関のすぐ左側がトイレと風呂。右側に納戸らしき小部屋。その奥、つまり住居の中心にあたるところがリビング兼ダイニングルーム。そのまた奥に四畳半ほどの洋室と和室。どの部屋も広くはないが、一応二LDKと呼べる間取りになっている。鑑識課員がそこそこに陣取って、指紋採取や写真撮影、血痕検査をしている。

リビングのクリーム色コーデュロイのソファーに直径十五センチくらいの血だまり。そのまわりに点々と小さな飛沫血痕。ダイニングルームのビニールタイル上にも血痕が散っている。

「係長、これどういうことです。部屋のあちこちに血がしたたってますがな」

「逡巡創の跡や。川添の左手には五本の逡巡創があった」

「シユンジユウソー……えらい珍しいもん持って死んだんですね」

マメちゃんが口をはさんだ。

「別に珍しくもないがな。自殺にはつきものや」

服部が応じる。

「そやかて、今、冬でっしやる。そんな花、どこで買うたんやろ……」

服部は怪訝な表情でマメちゃんを見つめ、

「おまえ、何をいうとるのや。逡巡創いうたらためらい傷のことやで」

「えっ……ぼく、春と秋の草と書いて、春秋草かいなと思て……」

「あほ、誰が花持って死ぬんじゃ。手まわしが良すぎるやないか……だいたいが春秋草とかいう花、見たことも聞いたこともないで」

「ぼくもおません」

「ばかたれ、要らんちよつかい出すな」

マメちゃんは尻尾を巻いて逃げ出した。

服部には簡単なことをわざわざ難しく言いまわす俗物趣味がある。そこをマメちゃんに衝かれたわけだが、服部はからかわれたとは露ほども思っていない。逡巡創が何であるかを知らぬマメちゃんではない。

「係長、川添はあのソファアに坐って手首切りよったんですね」

「そや、ソファアの脇にカミソリの刃が落ちてた。川添、最初は手首を切って死のうとした。しかし、どうしても死にきれんで、次に風呂場へ行った。水の張ってあった湯ぶねに手突っ込んでじっとしてた……湯ぶねの中にも相当量の血が流れ出た。もつとも、水は流れっ放しやった

からはつきりとは分らんけど……。川添の着てたカッターシャツ、左のそでが肩までびしょ濡れやった。……川添、それでも死にきれん。そこで洋室からベランダへ出て、地上めがけてまっさかさま……。ま、こんな具合や」

「遺書は？」

「今のところ、なし。けど、実況見分が終ったらこの家中を徹底的に搜索するから、どこからかポロッと出て来る可能性はある」

「飛び降りの目撃者は？」

「望み薄やな。この建物、南の端やし、ベランダから見えるのは道路と成人病センターだけ。センターの北側には窓らしいもんあらへん」

「訊込みは？」

「朝から始める」

「奥さんは？」

「子供連れて京都の実家へ帰ってた。川添がそうさせたらしい。今頃は遺体と対面しとるやろ、不憫なもんや」

「覚悟の自殺いうわけですな」

「そう……。そういうことになってしもたがな」

残念そうに呟いて、服部はメガネを外した。ポケットから薄汚れたハンカチを出してレンズを拭う。そこへ、鑑識課員が何事か相談に来た。あらましの状況は聞き終えたので、私は服部のそばを離れた。自分の眼で現場を確認することにする。

まず、トイレ。特に注意をひくところはない。ペーパーホルダーを包むピンクの布がしらじら

とした印象を与える。

次にバスルーム。FRP一体成形のユニットを据えたもので、天井から床まで全面が味気ないクリーム色プラスチックで蔽われている。湯ぶねは縁まで水があふれ、底が極く薄い茶色に染まっている。川添の血だ。

洗いの乾いた部分に、二、三の血痕。あとは流れたようだ。

血痕はバスルームから廊下、リビングルームを通り、奥の洋室まで三、四十センチ間隔で続いている。

ベランダにも数滴の血痕、スリッパが乱雑に脱ぎ捨てられていた。血の痕を辿れば、リビングルームからバスルーム、またリビング、洋室、ベランダと、飛び降りる前の川添の動きが如実に想像できる。

ダイニングルームの食卓上にはコーヒークップ一客。底に少し飲み残しがある。

リビングルームの大部分を占拠しているソファアームの上には血だまりと黒い書類かばん。その前のガラステーブル上には、二、三の書類と灰皿、たばことライター。灰皿の中にはキャビンの吸殻が五本。

その他、家具、調度類は収まるべきところに収まり、物色した跡も、争ったようすもないところをみれば、部屋全体の印象に特に不審はない。

「ヒャー」とかん高い声がする。マメちゃんがベランダの手すりから身を乗り出して下を覗き込んでいる。

足音を忍ばせて近づく。両手で太股のあたりを持ち、軽く揺すってやると、アワワツと何やらわけの分らぬ奇声を発して足をばたつかせた。反応があまりにオーバーだから、こちらまで面食

らってしまふ。鑑識課の全員と服部の冷たい視線を浴びた。

「あほ、大きな声出すな。近所迷惑やないか」

押し殺した声でマメちゃんを諫める。

「大きな声出させたん、黒さんですがな。ぼく、高所恐怖症でっせ」

「それやったら下を覗くな」

「そやかて……怖いもん見たさ、いうのがありますやろ」

「子供みたいなこというな」

自分のことはタナに上げてマメちゃんを責めた。

「ああ怖かった。これみて下さい」

と、マメちゃんは私の手を取り、自分の胸にあてた。

「どうです、まだ心臓がドキドキしてまっしやろ」

「いいつつ、私を見上げて眼を細め、品を作った。ハツとして手を引く。マメちゃん特有の逆襲だ。ドギマギした私を見て、エヘエへと笑っていやがる。

気分を整えようとたばこを手にしたが、ここで吸うわけにはいかない。一階の玄関にホットコーヒーの自動販売機があったのを思い出し、マメちゃんを誘って外へ出た。エレベーターで下に降りる。

紙コップ入りのインスタントコーヒーとショートホープを外のベンチに坐って味わう。寒さにブルツとひと震えすると刑事稼業の空しさが身に浸みた。

「さっき訊き忘れたけど、川添家へ最初に入ったん誰や？」

横に坐ったマメちゃんにいった。

「そこにいます」

マメちゃんの指さす先にさっきの警官が立っている。この寒空にご苦労なことだ。手招きする。警官は背を丸め手をこすり合せながらのっそり歩いて来た。たばこを差し出すと、一礼し、短い指で一本抜いた。火を点けてやる。

「君が最初に部屋に入ったんか」

「は、はい」

けむりと一緒に上ずった声を出した。

「まず、部屋に入った状況から教えてくれ」

「本署から指令がありまして、交番から安井巡査と自転車で駆けつけたところ、大勢の人が集まっております、その中に男が倒れておりました。現場保存の鉄則がありますから、やじ馬を脇へ除かせまして……」

「それはもうええ。川添宅にはどうやって入った？」

説明のくどきにイライラする。

「これはきつと上から落ちたに違いないと思料し、身元を特定すべく、遺体を調べましたところ……もちろん、私の指紋など付着しないように極力注意して調べました……ズボンのポケットから、小銭入れやキーホルダーと一緒に免許証を発見したのであります。それで、十一階に居住する川添隆幸さんであると知りました」

念入りなるご説明、まことに恐れ入る。

「安井巡査に飛び降り現場の保存監督を一任し、本職は十一階まで上りました。川添家のドアをドンドン叩いたのですが、返事がありません。押しても引いてもビクともしません。体当りして

強行突破しようと考えたのでありますが、現場保存の鉄則がありますから……」

あのドアは外開きだ。体当りしてどうできるものではない。

「本職はとなりの家からベランダ伝いに入るのが良からうと思ひ到りまして、右どなりの藤沢さん宅へ入れてもらいました。そして、あの壁を越えて川添家のベランダへ降り立ったわけでありまず」

と、そこで言葉を切つて、朴訥警官は上を見遣つた。

ベランダの、家の境にあたる部分には厚さ十センチくらいのコンクリート壁が手すりのところまで張り出しており、それを越えるにはサーカスマがいの危険な芸当を演じなければならない。マメちゃんにはとてもじゃないができない業だ。

「さつき、キーホルダーがあつたとか聞いたけど、玄関の鍵はなかつたんか」  
マメちゃんが訊いた。

「はあ、あとで詳しく調べたところ……あるにはありましたが、やはり遺体保存の鉄則がありますから……」

今度は遺体保存ときた。若手らしく、職務を規則どおり忠実にこなそうとしていたのがよく分る。ほほえましくもある。

「それからどないした。ベランダへ降りてから」

「現場を荒さないように注意深く玄関まで行き、つまみをひねって錠を外しました」

「照明はどうやった」

「食卓上のペンダントライトと、風呂場の電灯が点いてました」

「なるほど……鍵までかかつてたんか。……いや、ご苦労さん。参考になったわ」